

考古学は戦争や軍事組織を どのように認識するのか？

松戸市立博物館学芸員 藤原 哲

三上 では、これより講演に移らせていただきます。最初の講演は、本専攻を二〇一六年九月に修了した藤原哲さんの「考古学は戦争や軍事組織をどのように認識するのか？」です。それは藤原さん、お願いいたします

藤原 皆さん、こんにちは。ただいま三上コース長からご紹介のありました藤原です。よろしくお願ひします。

簡単な自己紹介をさせて頂くと、上野先生と同じく関西出身で、ちょっと荒い言葉が出るかもしれませんが、ご承知おきください。私は仕事で日本各地に住みましたが、不思議なことに関西の人はどこに行ってもしゃべり方を変えないですね。何故でしょうね。私かというと、完全に標準

語ですが、講演が盛り上がってくると、少し荒い言葉が出るかもしれないです。そのときはお許しくください。

出身地は大阪南部の岸和田で、京都の花園大学に行ったあと、平成二二年に総研大の博士課程に入学しました。当時は発掘調査技師として一〇年ほど働いていた社会人で、査読付きの論文もいくつか発表していました。ですから正直、学位は簡単に取れるだろうと軽く考えていたのですが、なかなか世の中厳しくて、総研大の諸先生の厳しいご指導を受けて、卒業したのは平成二八年、途中の休学も含めると六年ぐらいかかってしまいました。そこから千葉県と縁ができて、紆余曲折の末、現在は千葉県の松戸市で博物館の学芸員をやっております。

家族は、愛する妻と娘がいます、この間のゴールデンウィークに市原市にある地磁気逆転地層のチバニアンに家族旅行しました。地球の営みを体感できておもしろかったです。ただ、うちの娘はこういう歴史関係には全然興味を示さないのが悩みの種です。デイズニールランドとかだと喜んで行きますが、博物館に誘っても全然付いてこないもので、どうしたものかと悩んでいます。

さて、今回は『「もの」と「こと」…痕跡から行為・認識へ』という内容の講演をいたします。私の場合、「もの」が物的な考古資料を意味し「こと」は非物質的な戦争や軍事組織といった社会現象を指しています。つまり、武器・武具といった考古資料から、どうやって戦争や軍事組織を認識するのか、というのが今日のテーマです。話の流れは考古資料の性質についてお話しした後、戦場考古学という研究方法を紹介いたします。それをお話することによって、考古学でどのようにして戦争を認識するかの問題点や成果が浮き彫りになるでしょう。また、私が総研大に

において、どのようにして戦争や軍事組織を巡る研究を行ったのかの具体例を示し、時間があれば総研大の思い出話を語りたいたいと思っています。

では早速始めていきましょう。一般に歴史の資料ですが、当然ながらたくさんあります。文献資料、考古資料、口承資料、具象資料、映像資料などなど、戦争にあてはめて考えますと、戦争の文献資料としては、例えば戦争に行った人の陣中日記がありますね。旧軍で言うと、戦闘が終了すると『戦闘詳報』という報告書を作成していますので、こういうものが戦争の文献資料（一次資料）になります。

口承資料は、言い伝えとか昔話ですので、例えば、広島原爆の悲惨さを語り継ぐ会とか、祖父から聞いた軍隊内での鉄拳制裁の話などが戦争の口承資料になります。具象資料というのは絵画とか模型で、例えばナポレオンの戦争画にジャック・ルイ・ダヴィッドが描いた『アルプスを越えるナポレオン』というものがあります。この絵でナポレオンは格好良く白馬に颯爽と乗っていますが、実際はラバに乗っていました。いずれにせよ、こういったものが具象資料になりますね。

映像資料は実際の戦争の映像です。時代が新しくなればなるほど、映像資料は増加し、近年の戦争ではSNSなどで戦場の映像が膨大に拡散していますが後々の時代になれば、こういったものも映像資料として、歴史の資料になっていくことでしょう。

さて、考古資料ですが、これは「もの」、つまり物的な遺物です。ですから、理論的には過去の人類が残したあらゆる時代の、あらゆる物質が対象になります。これは考古学のものすごくメ

リットな点です。というのには、文字が発明されたのはせいぜい五〇〇〇年前ぐらいなのに対し、人類の歴史は七〇〇万年もあるからです。人類の歴史の99%は文字がない時代で考古資料しかない。だから、私が学生のころには考古学が唯一、人類史を再構築できる、みたいなことをおっしゃる先生がおられて、私は、ああそうだなと思っていました。

ただ、物質資料といっても、全部の物質が残っているわけではありません。発掘資料として発見される、土の中に残っているのはすごく限られてしまいます。例えば、竪穴住居(建物)というものがありますね。これは住居ですから、柱があつて、屋根があつて、入口があるのが普通です。しかしながら発掘で残っている建物跡というのは地下の部分しか残らないです。屋根も残っていないれば柱も残っていない。せいぜい柱の痕跡しか残っていないので、物質資料を扱うけれども、このうちのほんの一部しか残っていないのが考古学の痛いところです。

それから、考古資料は沈黙資料であつて、パターン化することによって特徴を発揮しやすい。これは後で説明しますので置いておきますが、要は個別の固有名詞などは基本的に分かりません。古墳を発掘しても、それが誰のお墓かというのは墓誌でも残っていない限り考古学からは分かりません。考古資料の欠点はそういうところにあります。

すべての物的資料ということであれば、戦争とか軍事組織に関してもたくさん構成要素がありますね。例えば防衛施設、お城とか要塞です。皆さんご存知のように、この歴博も佐倉城のお城の跡に位置しています。それから武器、刀とか槍とか鉄砲、珍しい資料では受傷人骨といって、実際に骨に武器が刺さっているような資料が残っています。そういった諸々のものが戦争とか軍

事組織を復元する考古資料になります。ただし、これらがあるから戦争が研究できるかと言われると、これもまたなかなか難しいところですよ。

例えば、皆さん、江戸時代を想像してください。江戸時代はお城が日本各地にいっぱいあります。つまり防衛施設がいっぱいです。武器も日本刀が山ほどあります。私は以前、某県の教育委員会に在籍していましたが、そこでは数ヶ月に一度、刀剣審査会を行いました。銃刀法に基づいて刀を登録するわけですが、21世紀の現在でも、蔵から新しく刀が出てきたとかの申請が毎月10〜20件ぐらいあります。それくらい武器というのは日本にいっぱいあったんですね。江戸時代には本当にびっくりするくらい武器があふれていたと思います。

それから受傷人骨、これは江戸時代にもあります。江戸時代は戦争をしていないので実戦で刀を使うことがなかったため死体を試し切りして、これはよく切れる、というのを証明したのです。刀で切った人骨が小塚原の刑場などで実際出ています。そういうことで、戦争の資料とされている防衛施設、武器、受傷人骨は江戸時代に揃っていることになります。

でも、江戸時代は戦争の時代かと言われると、実際は太平の世が続いたことが分かっていますので、考古学上の武器資料があるから戦争が明らかになるか、といったら、それはまた微妙な難しいところですよ。だから、実際、考古学で戦争を検証できるかどうかというのは議論にもなりません、分からないではないかという意見もあります。反対に、確実な戦争研究の考古学的手法として戦場考古学というものがあります。これは文字どおり、実際の戦場跡を発掘します。だから、これはもう間違いなく戦争なわけです。

● (公開講演 1)



図1 リトルビッグホーンの戦い

エドガー・サミュエル・パクソン (1852-1919) 画『カスター最後の戦い (Custer's Last Stand)』
(1899年) パブリックドメイン

では戦場考古学の具体例を見ていきましょう。戦争考古学で一番有名なのはアメリカのリトルビッグホーンの戦いですが、これは一八七六年、日本で言う明治九年にアメリカであった戦いです(図1)。南北戦争で活躍したカスター中佐がアメリカの第七騎兵隊を率いて、ネイティブ・アメリカンの討伐に行きますが、逆に色々な理由で完敗した戦いです。この戦闘を美化して描いた絵画もありますが、それが間違いだったというのが発掘で明らかになります。これは後で説明し



図2 リトル・ビッグホーン出土遺物1

ます。

さて、戦場考古学ではどういったことをするかというと、戦場はすごく広いので、いわゆる発掘、日本で実施しているような発掘ではなくて、何か落ちていないか、と金属探知機で調査するのです。そして金属探知機の反応があったところの遺物を取り上げたり、部分的に掘ったりしながら、出土地点をポイントで記録していくわけです。

出土資料は、戦場ですから、もちろん武器が出てきます。図2や3のようなりボルバー（回転式拳銃）の一部とか薬莖とかが出ています。図4はブッチャーナイフ、肉切りの包丁で本来は武器ではありません。アメリカ先住民の人たちは斧にこういったナイフを付けて戦っていました。それからおもしろいのは、図5のように鉄の矢鏃が出ています。

この戦場ではアメリカ軍はスプリングフィールド M1873 という制定銃を装備していました。ですから薬莖もどれがアメリカ軍のものか分かります。ところが、

● (公開講演 1)

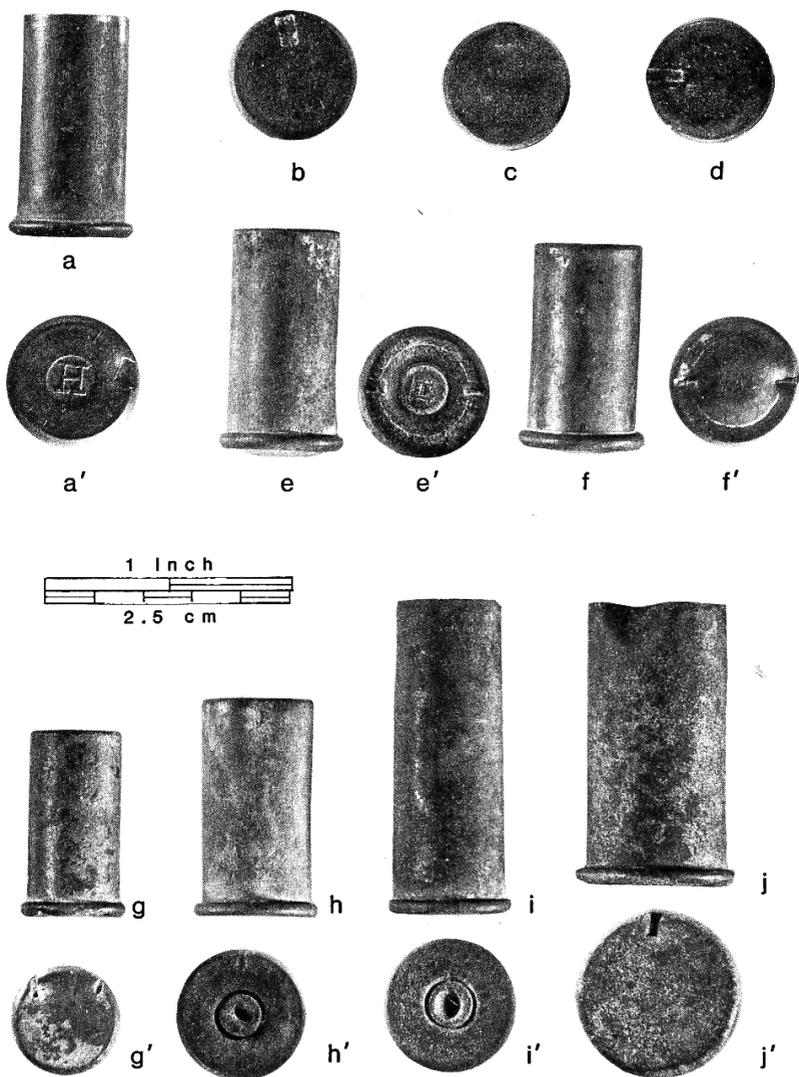


図3 リトル・ビッグホーン出土遺物2

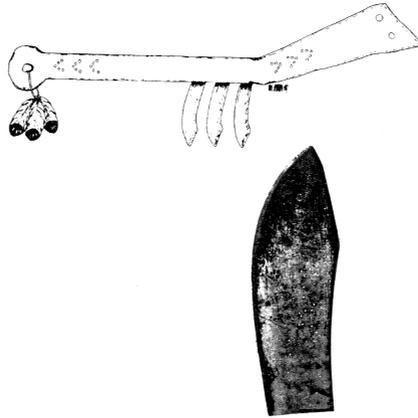


図4 リトル・ビッグホーン出土遺物3

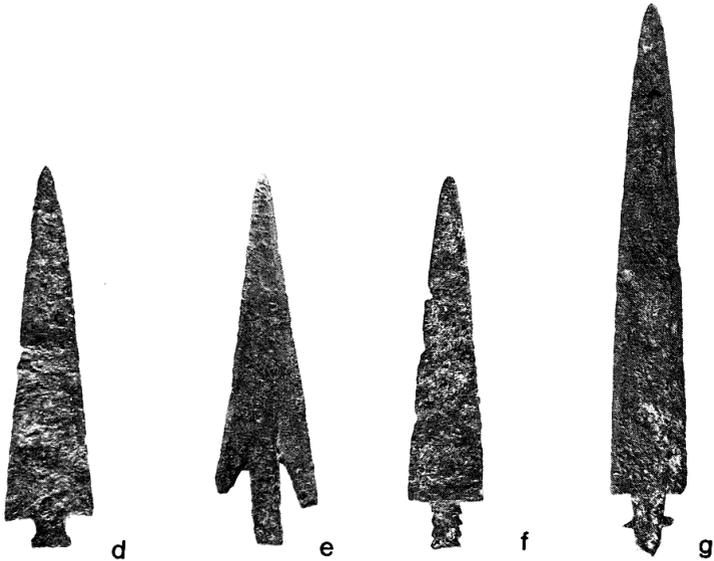


図5 リトル・ビッグホーン出土遺物4

Scott, D. *et. al.* 1989. *Archaeological perspectives on the Battle of the Little Bighorn.* University of Oklahoma Pressより転載

先住民の人たちは弓で戦い、もしくは武器商人から買った雑多な銃を持っているので、いろいろな形の薬莖が出てきます。そういうことで、どちらがアメリカ軍で、どちら先住民軍か把握できず、部隊の動きまでも復元されています。

ところで、この戦いは結果的にアメリカ騎兵隊（白人）が負けました。ですから、なるべく負けを認めたくないわけですね。だから、もう玉碎みたいに立派に戦ったという絵を描いて、カスターは最後まで立派に戦い抜いたというのを主張することになります（図1）。カスターが亡くなった場所をラスト・スタンド・ヒル、つまり最後に立った丘と言っていたのですが、先ほど説明した発掘調査の結果、最後にカスターが亡くなったところは、どうもラスト・スタンド・ヒルではないだろうということも明らかになりました。そういう意味で発掘調査によって歴史が変わった事例の一つです。

リトルビッグホーンは海外の事例ですが、日本でも同じような研究があって、西南戦争で戦場考古学が実践されています。熊本県の田原坂とか横平山といった戦場で弾丸とか砲丸とか薬莖とか、いろいろ出ています。西南戦争遺跡として国指定史跡になっており、使用された銃弾の鉛同位体比の分析（産地同定）なども行われています。

次は長崎県の原城跡、江戸時代の島原の乱の舞台です。ここから火縄銃の弾丸なども出るので、特筆すべき事柄として人骨が大量に出土しています。いわゆる受傷人骨、武器によって傷ついた人骨です。この島原の乱は日本では珍しい宗教戦争でした。籠城側は3万人以上もいたのですが、もう虐殺みたいな感じで、徹底的に殺すわけです。おそらく原城の受傷人骨は、そうい

うときに殺された人たちの痕跡だろうと思います。むしろこれは戦争というよりは一方的なジェノサイドの跡ですね。

それから、鎌倉時代の元寇です。モンゴルが攻めてきた場所の海底から、てつほう、モンゴル軍が使っていた兜などが見つかっています。長崎県の鷹島海底遺跡として国の史跡に指定されていますが、これも戦場の跡ですね。

こういった事例でお気づきになるかもしれませんが、ここは戦場だ、という情報があつて、そこで発掘資料が行われればかなりおもしろいことが分かります。文献で残っていないようなことを明らかにすることも可能です。ところが、ここは戦場だった、という情報が全く無い状態で考古資料しかなければ、そこが戦場かどうかの判断はとても難しくなってきました。

例えばドイツのベルリンの北にトレンゼ溪谷というところがあります。そこで青銅器時代の、紀元前一二〇〇年ぐらいの遺跡から武器とか傷ついた人骨がたくさん出ています。図6の1、2、4は青銅の銚ですね。同3が青銅の矢じり、同7が横斧です。このほかに木製のこん棒も出土しています。この遺跡で特徴的なのは、人骨がたくさん出ていて、実際、矢鏃が刺さったり、頭を殴られたような痕跡の人骨もあります。しかも、ここから出てくる人骨は99%が男性で、かつ若い男性と中年の男性に限られているそうです。こういう特徴があると、おそらく戦場の跡だろうな、とは思いますが、それ以外の情報がないので、論文でもBattlefield?となっていますね。考古学だけだと決定打がどうしても足りない。決定打というのは固有名詞ですね。誰と誰が戦った。どういう組織が戦った、というような固有名詞がわからないために考古学から戦闘を分析すると

● (公開講演 1)

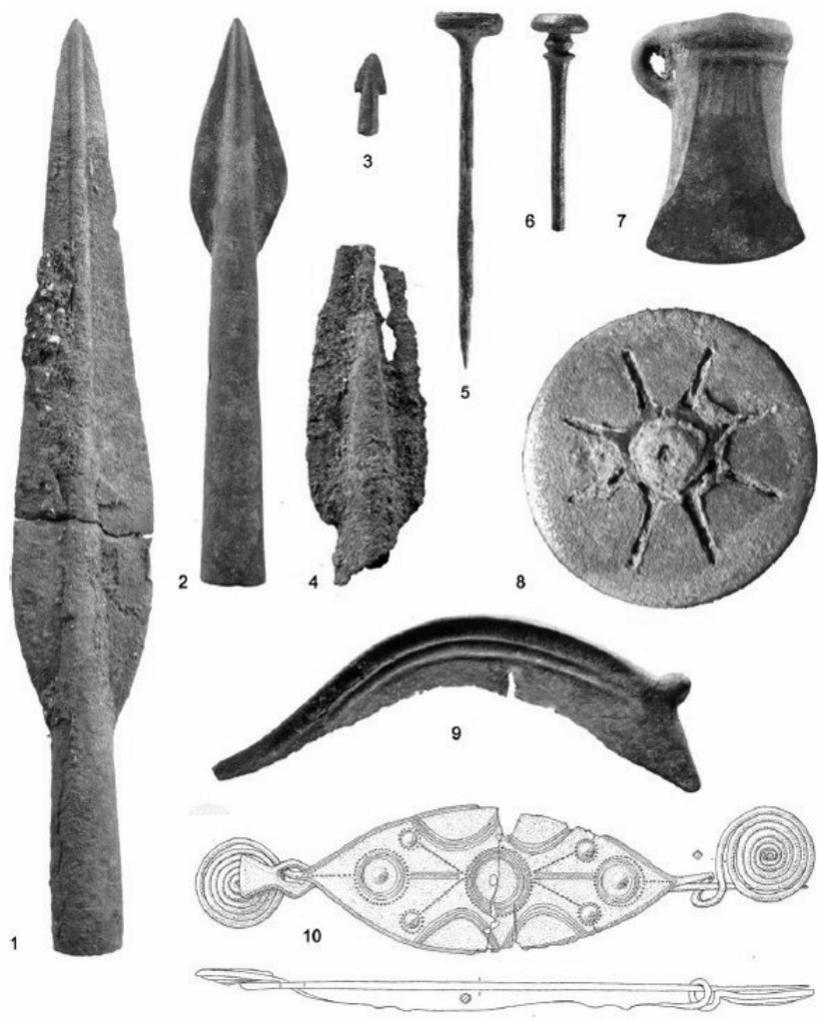


図6 トレンゼ溪谷出土遺物

Jantzen, D. et al. 2011. A Bronze Age battlefield? Weapons and trauma in the Tollense Valley, north-eastern Germany. *Antiquity*, 85より転載

いうのはかなり難しくなります。

では、全く考古学から戦争が検討できないのかと言われると、いやいや、やり方によってはなんとかなりますよ、と私は言いたい。では、どういった方法があるかというのを私の拙い研究から紹介させていただきます。

まず弥生時代です。私は最初、弥生の集落研究から考古学を始めたので、弥生時代の戦闘をまず考えました。歴博の前館長の佐原真先生が弥生時代の戦闘をご研究されていたので、日本考古学では弥生時代から戦闘が始まった、と言われており、教科書でもそのように記述されています。しかし具体的にどういいう戦いだったかは良くわかっていません。私が発掘経験のある大阪府の池上曽根遺跡では防御用とされる大きな環濠がありますが、環濠の埋土もゴミ溜めのように防御用とは考え難いです。ただし、さっき言った人骨に傷を持つ受傷人骨が弥生時代の九州を中心にくさん見つかっているので争いがあった可能性は高いです。例えば、福岡県のスタレ遺跡では第2胸椎の椎弓板に、背後の右斜め上から右剣の先みたいなのが刺さっていました。かなり力を込めてグサツと刺したのでしょう。同じく福岡県の永岡遺跡では右腸骨、お尻の当たりに後方の下から上へ、グサツと青銅製の剣が刺さっています。このように、弥生時代の受傷人骨という傷ついた骨を調べてみると、いくつかのパターンが認められますが、特徴的なのは後ろから攻撃されている例が非常に多いことです(図7)。こういった証拠から、どういった戦いがあったのかと考えたときに、民族誌の事例でもしろい類似点があることに気が付きました。

南米のベネズエラという国にいるヤノマミ族という人たちは好戦的な、戦いの好きな集団して

● (公開講演 1)

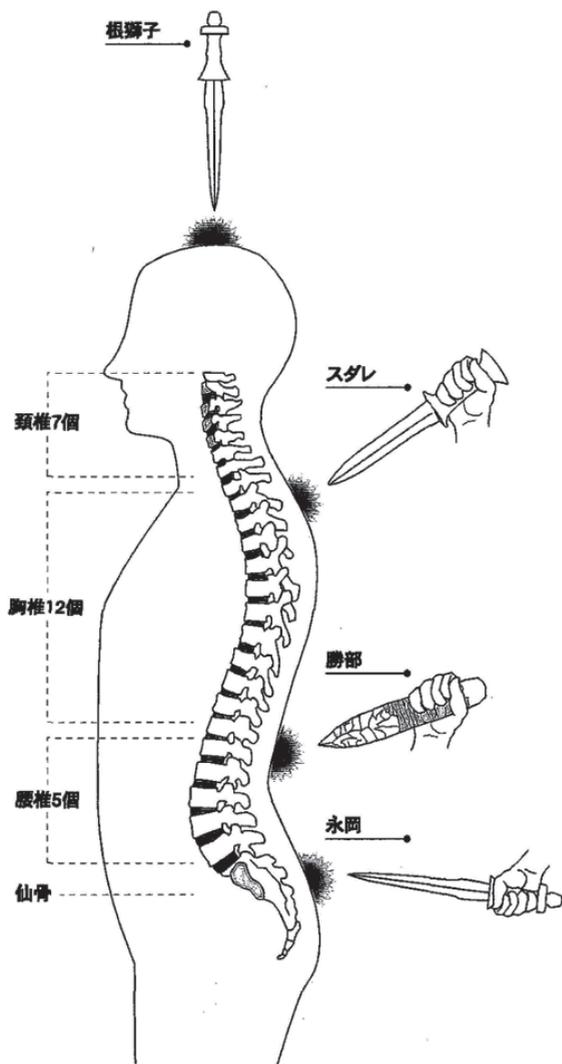


図7 弥生時代の石剣・青銅剣による受傷箇所

藤原哲 2004「弥生時代の戦闘戦術」『日本考古学』18より転載

有名ですが、彼らのような古い生活スタイルを残している人たちの戦い方は、結構特徴的です。特徴的というのは、われわれがイメージする二〇世紀とか二一世紀の、無慈悲な総力戦とは異なつて、儀礼的な戦争が非常に多いということです。儀礼的な戦争というのは、一応敵対する集団同士が争う訳ですが、けが人が出たり、亡くなった人が出たら、そこでストップしてしまいます。はい、おしまい、という感じです。現代の戦争とは逆ですね。近代戦争は大義を理由に被害を顧

みずにどんどん人を殺すのですが、民族誌にみられる戦争は形にはまった、儀礼的な戦争が多いのです。

あと実際に戦う理由は、けんかとか、もしくは自分の奥さんが寝取られたとか、すごく個人的なトラブルで、「あいつをやっつけるんだ」と言つて闇討ちをしかける。やられたほうは「うちの家族がやられた。やり返せ」と。また同じように徒党を組んで、1人か2人を闇討ちするわけです。すると、やられたほうがまたやり返す、またやり返しのやり返し……。こういうのが延々と続くのが民族誌の戦争で一番多いスタイルになります。

なぜこうなるかというところ、やっぱり誰だつて自分は傷つきたくありません。だから、こつそり後ろから襲撃したほうが安全といえます。われわれがイメージしている戦争、すなわち近代の戦争は集団と集団がドカンとぶつかり合う戦闘なので、味方の死傷者もとても多くなります。そのような戦いは特別な理由が無い限りする必要はないでしょう。弥生時代の戦いの実相も、人骨の資料から考えると、おそらく小規模な、個人的ないさかいを巡つて争つた戦いが中心ではないかと私は考えました。これが弥生時代の戦闘の研究です。

それから古墳時代に移ります。古墳時代は武器で傷ついた受傷人骨は皆無ではないですが少なくとも地域的にも偏っています。その代わり、古墳時代には戦いの道具である武器や武具が多いですね。めっちゃめっちゃ多いです。びっくりするくらい多いです。しかし武器が多いから、大きな軍事組織があったのか、戦争が激しかったのかというところ、先ほど江戸時代を例にご説明したように、武器だけでは実際に戦争があったのかどうかは分かりません。

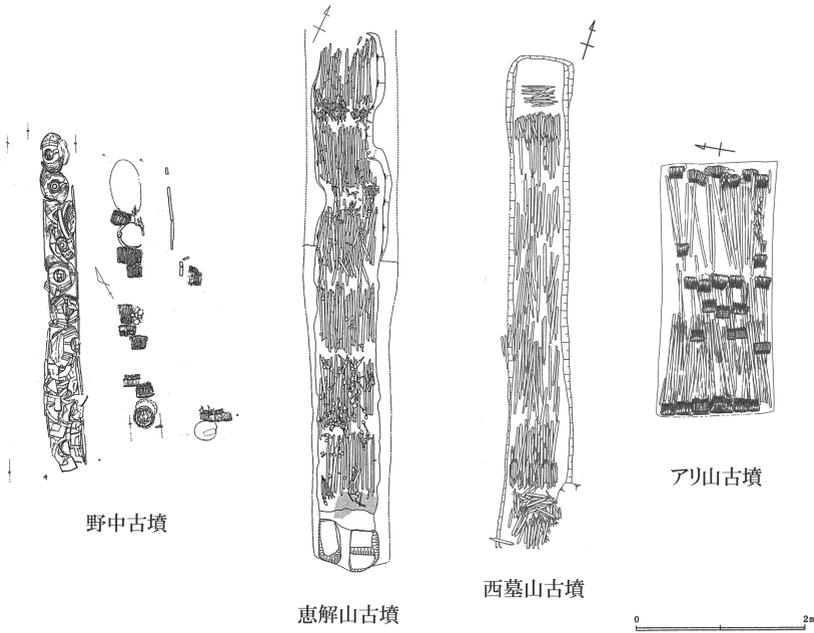


図8 古墳時代の大量埋納された武器・武具

藤原哲 2015「古墳時代における軍事組織像の検討」『古代文化』67-2より転載

では、どうしたらいいのか、ということですが、まず武器が非常に多い事実を説明しましょう。大阪府野中古墳は28mの方墳ですが、そこでは短甲がずらつと並んでいました。おそらく長い木箱に入っていたのでしょう。同じ大阪府のアリ山古墳でも、刀剣が85振、槍矛9本、鉄鏃一五四二個とか、もうめちゃめちゃ武器・武具があります。京都府の恵解山とか大阪府の西墓山とかも同じように、刀が一〇〇振単位ですらつと入って出土しています(図8)。このようなものを目の当たりにすると、たくさんの武器を扱った軍事組織があったのかな、と思いがち

ですけれども、何度も述べているように考古学だけで軍事組織を証明することは大変難しい。

古墳時代にどれくらい武器があるか、ちょっと計算してみました。大阪府の古市・百舌鳥古墳群、これは伝仁徳陵とか応神陵とかいわれる大きな古墳があるところですが、天皇陵も含まれているため全部を掘ることができません。たとえ掘ったところで主体部に遺物が残っていない場合もあります。しかし先ほど説明した野中やアリ山のような非常に残りのいい古墳もいくつかあるので、残りの良い古墳の数量を元に、同じ規模の古墳がどれくらい武器を持っているかというシミュレーションで計算したところ、私の推計ですが、古市と百舌鳥だけで2万点ぐらいの武器・武具がありそうだということになりました。重さに換算すると55トンぐらいです。

これは古墳時代中期の一〇〇年間の累計ですので、1世代あたりとか、1年単位に換算すると武器量は少なくなります。それを多いと見るか、少ないと見るかは見解が分かれるでしょうが、一つ確実なのは、ここで示される数値は副葬されただけの量だということです。副葬とは土の中に埋める廃棄行為です。だから副葬していないで、実際に使用した武器とか道具もあつたことでしょうし、ヤマト政権が各地に配布した武器も含めれば、実際の武器はもつともつと多くなるわけです。

それから、これは武器というよりも鉄製品の問題ですが、製鉄段階の工程が古墳時代中期にあつたかどうかは微妙なところです。ですから鉄製武器や武具がすごく貴重だったであつたことは間違いないでしょう。輸入した材料を使うか、始まったばかりの製錬技術を使うか、どちらにせよ、貴重な鉄から、あえて武器を作っているのはかなり大きなポイントだと思えます。というの

は、この時代、古墳時代の倭人は鏡が大好きです。威信財や儀礼で使うのであれば鏡でも良い訳です。しかし古墳時代の、特に中期では武器が大変重視されました。武器をありがたがっていたと言ひ換えてもよいと思います。

貴重な鉄製品として武器を大量に作っているというのは間違いないとしても、これはお墓から出土するので、副葬品であることも間違いないでしょう。ただ、副葬品だとしても、古墳時代中期の小さい古墳なんかには顕著なのですが、武器のワンセットだけを副葬しているような人・集団が日本各地に出現しています(図9)。武器・武具の副葬パターンとしては、足元とか、頭の部分に甲冑を置いて、体の周りに刀や弓矢を置いて葬送の儀礼を行っている集団があったことも考古学から示すことができます。このように武器を非常にありがたがった人たち、自分の死に際して、遺体の周辺を武器だけで囲った集団が、古墳時代には存在していました。

こうしたことを証明するために、事例研究として宮崎県の島内地下式横穴墓の研究も行いましたが、一般に古墳にはランクがあります。わかりやすく言うと、大きな前方後円墳が偉くて立派です。次には前方後方墳が来たり、大きい円墳が来たりと、古墳には階層があるのですが、地下式横穴墓というのは、どちらかといえば下のランクですね。かつ非常に地方的な様相が強く、南九州だけで築かれた墓です。それにもかかわらず、南九州の地下式横穴墓からは非常に立派な武器・武具が大量に出てくる。これはなんらかの政治的な意図がない限り、こういうことはあり得ないと思える訳です。やはりそこに武器が集中的に配られる事実は、彼らがなんらかの軍事的な役割を担った集団であると私は考えました。

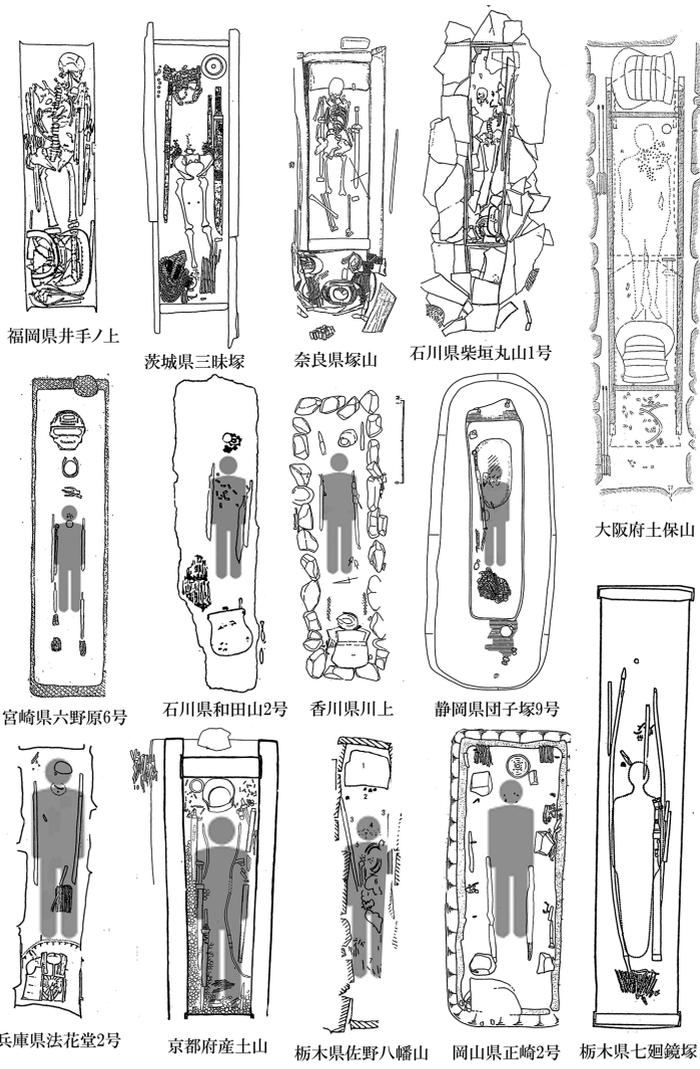


図9 古墳時代の武器を副葬した古墳主体部
 藤原哲 2012「副葬品配置からみた武器の価値」『総研大文化科学研究』8より転載

それから、考古学から武器を研究する別の視点として、戦闘教義 (battle doctrine) という考え方が利用できます。これは軍事用語ですが、軍隊というのはやたらめったら戦うわけではなくて、軍隊毎に戦う方法 (戦闘教義) を持っているものです。われわれはこのように戦う、という考え方です。例えば、古代ギリシャの重装歩兵 (ホプリテス) は盾と槍を持っていました。これです。どういふふうに戦うかという、盾で左側を守って右側の槍で攻撃します。すると、右側が空いてしまうので、隣の人の左の盾で隣の人物の右側を守る。すると、次は隣の人の右がガラ空きになります。こういう戦い方を古代ギリシャの人たちは行っていました。それが戦い方のルール (戦闘教義) です。だから、古代ギリシャの武器の組み合わせは、盾と槍と甲冑と決まってくるわけですね。

同じように中世ヨーロッパだと、重装備の甲冑を着た騎士が戦うわけですが、これはいわゆる板冑ですね。最近、日本の短甲も板冑と呼ぶ研究者が増えましたが、中世ヨーロッパの甲冑は文字どおりプレートのアーマーです。もうこれは完璧な武装ですから盾は持つ必要がなくなります。装備が厚く剣で切り付けても切れないから、剣もあまり意味がなくなる。ではどうするかというと、プレートの隙間を狙って槍で突いたり、もしくはハンマーで力づくになぐる。中世ヨーロッパではこういう戦い方になってきます。

対照的に、モンゴルは、広大な平原で馬に乗って戦うわけですから、重い甲冑を着ていると動けない。ですから、装備が軽装になります。軽い甲冑で防御力は弱まりますが、その代わりに馬

でどんどん走る機動戦になります。好まれた武器は弓で、ヒット・エンド・ラン戦法、ボクサーのモハメド・アリのように、蝶のように舞い、蜂のように刺す。戦い方をします。このように武器というのはなんらかの戦い方、戦闘教義と非常に密接な関係があります。これは実際に戦っていないくても、戦い方の文化として継承されていきます。

じゃあ、古代の日本の場合はどうかというのと、日本の古墳時代というのは、東アジアでいうと、五胡十六国の動乱期で、中華の中心地である中原に野蛮人とされていた周辺騎馬民族がどんどん攻め込んできて、いろいろな王朝を作る時代でした。そうした騎馬民族たちの、この時代の戦いの特徴は重装備の騎兵です。高句麗の壁画にあるように馬にまで甲冑をつけて槍を持って集団で攻めて来られたら、それはそれは恐ろしいことでしょう。先ほど述べたモンゴルのような機動力はないかもしれないけれど、攻撃力や打撃力は高かっただろうと思います。大陸に渡った倭人はこういう騎兵に遭遇する危険がありました。重装備の騎兵がドドドと攻めてきた場合、守るほうは刀を振り回すよりも密集して槍衾を作ったほうが対決しやすいと思います。実際、高句麗の南進に苦しんだ朝鮮半島南部の武器組成は、槍とか戟げきとか、長い武器が多いですね。あと特徴的なのはお城のあり方です。朝鮮半島周辺では五女山城のようなお城がたくさん存在しています。なぜわざわざこういうことを言うかというのと、同時代の日本列島ではお城の跡がないからです。では、その頃の日本はどういう戦い方をしていたかというのと、埴輪を見ていただくと武装のあり方がよく分かります。武装した人物埴輪をみると弓と刀が多くみられます。これが倭人というか、昔の日本人といえますか、そういう集団が好んだ武器です。先ほど高句麗壁画でみたような

馬の甲冑、馬甲とか、馬冑と言われるものも国内で出土している事例はありますが、馬具に多いのは飾り用やシンプルな馬具です。そっちのほうが圧倒的に多い。実際、日本の場合は馬に乗って戦っている痕跡はあまり認められません。

まとめますと、朝鮮半島を含めた大陸での戦い方は武器の組成、組み合わせから考えると、弓はもちろん使っていますが、多いのは鉾とか戟げきという長い武器です。それから、馬に乗って重装騎兵が戦い、お城を取ったり、取られたりの、城郭戦が発達します。他方、海をはさんだ日本で多い武器は弓と刀です。武器の種別（戦闘教義）からすると明らかに戦い方が違うといえるでしょう。倭軍の主力は歩兵です。それから城郭の遺構がありません。『日本書記』とか古い時代の文献を調べてみても、やっぱりお城が存在していなくて、大化の改新が起きたときに、中大兄皇子はお城の代わりに法興寺という寺を使用して敵の襲来に備えたと書いている。お城がないので、堅固な建物は寺院くらいになるわけです。それくらいに日本列島ではお城での戦闘がありませんでした。城郭が発達した大陸とは戦い方が明らかに違います。こういった分析を考古資料から行うことによって、考古学から、昔の時代の戦い方を明らかにすることができるのではないかと思っています。

最後に埴輪の分析ですね。関東地方は素晴らしい人物埴輪が多いですが、埴輪や埴輪配列がどういったものを表すかについてはたくさんの研究や様々な意見があります。しかし、少なくとも、人物埴輪の髪型とか服装から、ある程度の男女差や階層性を明らかにすることができると思います。



図10 国宝武人埴輪

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

っているような音まで聞こえてきそうな、すごく優れた埴輪ですが、彼も籠手をつけた両手を前に捧げています。その他の上位階層の人たちの武装では鞆ゆきという矢を背負う道具を身に着けている人たちもいます。また有名な国宝の武人埴輪のように上から下まで完全武装した人たちもいます(図10)。

一方、階層的に低いと思われる人たちは、盾を持って句兵(長柄武器)を持っている人たちが多いです。盾持ち埴輪と言われている人物埴輪の一群です。

まとめて言いますと、古墳時代には埴輪配列の中心や儀礼を行っている首長や王というような、そういった指導者層が存在し、彼らは防具として籠手をつけて儀礼に臨みました。また、完全武装した職業軍人のように軍事に特化した人たちも一部にいて、それらの下に兵卒、下士官みたい

埴輪人物の階層性と武器との関係を見てみると、一番上位の階層と考えられる立派な角髪みづらをしている男性などは、どちらかというところ埴輪配列の中心で儀礼を行っています。ですが、多くの場合、彼らは籠手をはめています。福島県神谷作一

○一号墳の人物埴輪は、天冠から枝分かれた鈴がシャンシャン鳴

● (公開講演 1)

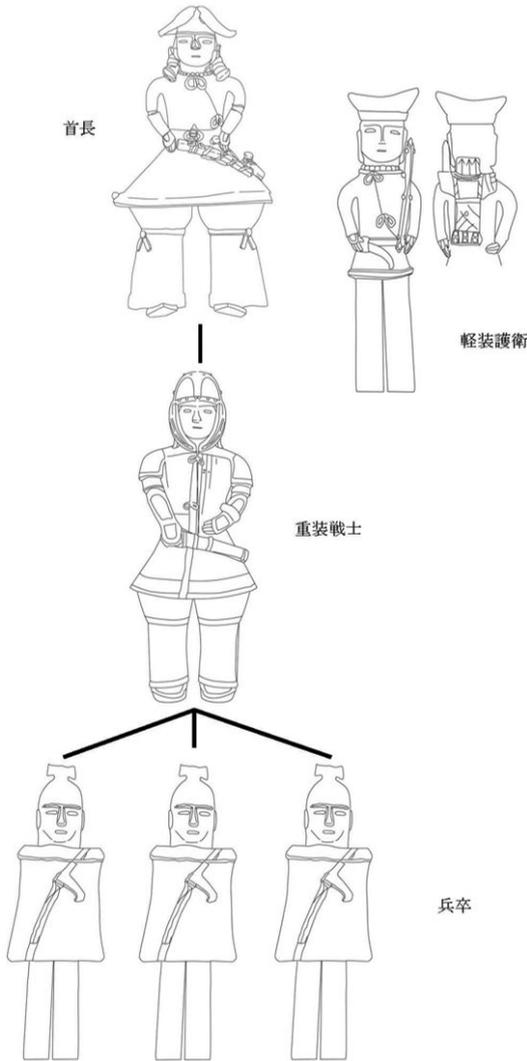


図11 武人埴輪からみた古墳時代の軍事階層

藤原哲 2018『日本列島における戦争と国家の起源』雄山閣より転載

な人たちとして盾と長柄武器を持って装備している人たちが存在したと想定できます(図11)。こういった武装の違いにみられる階層性は、人物埴輪からみて、少なくとも古墳時代後期の関東地方で存在していたことは間違いないと考えています。

文献では国造軍といって、それぞれの国造たちが軍事集団を組織していたと言われているので

すが、そういう国造軍みたいな地方の軍隊的階層は、少なくとも古墳時代後期には、ある程度できていたのではないのでしょうか。

これまで話してきた研究方法や成果によると、考古学から戦争とか軍事組織の研究は、難しいのですが、やり方によってはなんとか資料をよく調査・検討することで可能なのではないだろうかと考えています。

時間になりましたので、私の総研大の思い出、平成二二年から六年間在籍していた頃の思い出は、あとの鼎談のほうに回したいと思います。

以上で、私の発表を終わらせていただきたいと思います。お聞き苦しいところがあったかと思えますが、ご清聴ありがとうございます。(拍手)